

# 泉 いずみ

―目次―

表紙「幽霊飴」

「老いと病の中を生きる」 荒山淳師

「コラム百折不撓」 住職

連載「ハヤブサ物語22」

ハザード会・仏教会報告

野呂ファミリー通信③

愛西市の自治を問う③

幽霊飴のはなし

連載「私の出会った神様たち⑤」

さとのりの知恵を読む31 「五つの壁」

掲示板・お知らせなど



子を想う 母の御霊や 地藏盆 博子



荒山 淳

名古屋東別院教化センター長

◆未だ出口の見えないコロナ問題を。ワクチン接種をしたけれども「もし万が一」と、不安な生活を送っておられることかと思えます。◆しかし、こんなときだからこそ、こころ閑かに思案をめぐらすべき時が到来しているのではないのでしょうか。八十年の人生を成就されたお釈迦さまの晩年を皆さんとともに尋ねてみたいと思います。

◆お釈迦さまが重い病から回復されて、阿難よ、私も今や老い、歳をとり、老体になり、晩年に達し、老衰した。私も齢八十になる。阿難よ、例えば古い車が革紐（かわひも）で補強し動いているように、まさに私の身体も革紐で補強して動いているようなものだ。しかし阿難、私が一切の形相（ぎょうそう）に心を向けず、一部の感受は制御して、形相なき精神集中を達成して修するときに私の身体はいっそう安らかなのである。◆それ故に、阿難よ、ここにて、そなたたちは自己を島とし自己を抛り所（よりどころ）として修するがよい、他のものを抛り所としてはならない。

また法を島とし法を抛り所として修するがよい、他のものを抛り所としてはならない。（中略）法を島とし法を抛り所として他のものを抛り所とせず修する者たちは、最上至高の境地にある、私の比丘となろう、彼らは学びを愛する者たちなのだから。（『長部経典』第一六）

◆と、閑かに語られるのでした。年老いた自身を古ぼけた荷車に喩（たと）えられ、周りの人々に支えられ護られながらも生涯を送ることが出来た釈尊の述懐は、しみじみと私どもの心に迫るものがあります。◆私たちが生きるうえに皆等しく、必ず最後に会わねばならないものがあります。それは、一つ目は老いていく我が身、二つ目に病の我が身、そして最後には死ぬであろう自分に会わねばならないということですね。◆現実生活では「形相（すがた）がたかたち実体あるもの」ばかりに心を向けて、自分の人生で果たしたい夢や希望、それらを手に入れようとする「一部の感受」を目標にして人生を送る限り、自分自身は全く問題になりません。目標を達成することが人生なのだと思ひ込んでいます。◆未来に描く夢や希望や目標に突き進むとき、そこには老いることも病むことも、ケガをするということも、いわんや死ぬということなど計画の中に入れてはいけません。わが身の老・病・死の事実を抜きにして、人生全体を暴河に

押し流してしまふ問題があるのです。そのことに気がつかぬまま駆け足で生きて来た自分が、はたと気がつくとも走ろうにも力尽きているのです。月日の過ぎ去るのは早く、人生は日暮れて道遠しです。行く手に待ち受けていたのは皮肉にも「成りたくもないものに成らねばならない」という問題が残るわけです。まったく不本意な事です。老いていく身は切なく、病の身は悲しく、死んでいく身は儂（はかな）いといえます。こんな自分を見つげるために生きてきたわけではありませんし、苦勞を重ねてきたわけでもありません。なのに、我が身に出あってみたら、もうどうしようもないのです。そして、そういう我が身に出あうことを通して、「念仏申せ」という喚（よ）びかけに、少しだけ呼応が出来るようになるのです。◆お釈迦さまが生きておられたインドでも雨季には、普段の河川が暴河となつて一面海のようになりといます。そのようなときには高い場所へ避難し生命を守ります。高い場所を「島」と呼び、憑（たよ）りになる場所となるのです。人生に起こる暴河にも、釈尊はうろたえることなく自己を島とされ、法を島とされ、死に至るほどの激烈な病の苦も、老衰の不自由がもたらす苦も、深く透徹したまことの心で受けとめ、静謐（せいひつ）で安穩な最上至高の境地に住されたのです。◆私たちは変異していくコロナウイルスが自分を苦しめていると

思っています。そうではないのです。自分自身の安心を得ようと、「もし万が一」と疑う心で不安の因（たね）ばかりを探し回ることが、自分を暴河の真つ只中に押し流しているのではないのでしょうか。◆もつと言え、安心・安全な場所が、火宅無常の娑婆世界にあると思われませんか？安心・安全という浅き夢幻を追い続ける限り、安穩な境地はますます遠ざかるばかりではないのでしょうか。◆十劫の永き間、仏の本願を疑い暴河に流され続けてきた私に、お釈迦さまは閑かに「自己を島とし、法を島とし」なさいと語られるのです。決して自分の努力や知恵才覚で「他に拠る」疑いの心がなくなるものではないと、ただ念仏して「南無阿弥陀仏」の喚ぶ声に呼応すると、真実が明かされることを、お釈迦さまは今も尚、言葉尽くして語り続けて下さったのです。



暑い夏が過ぎて、朝晩はめっきりと涼しくなりました。秋は良いですね。空が澄んでいるのか、晴れた日は何か空が高くなったような感じがします。

中秋の名月（九月二十二日）は曇っており、月はくつきりと見れなかったですが、雲の合間からたまーに顔を出していました。虫の鳴き声と雲の合間から見える月が何とも言えない風情をかもしだしておりました。秋の夜長を感じられるような生活ができていれば良いですが、なかなかそのような余裕もなくあつという間に一日が過ぎていきます。

つつい仕事や私生活が忙殺され、余裕がなくなる日々が続くと、何かにすがりたくなくなります。何気なくぼーっとテレビを見ていても、「今日の占い！」なんてコーナーで「今日の運勢が良い○○は」って始まる。いつもは「そんな事で自分の今日の一日が決まってたまるか」という思いもあり、全く気にしないことも、多少気にしてしまう自分もあります。「今日の運気を上げるには、嫌なことは嫌だとはっきり言いましょう」や「今日は色々挑戦する気持ち大切に！」と言われて、「でしようね！」と結局思ってしまうですが、その度に私は何て都合の良い人間なんだと思ってしまう。私には親鸞聖人の書かれた「正像末和讃」には

かなしきかなや道俗の  
良日吉日をえらばしめ  
天神地祇をあがめつつ  
卜占祭祀つとめとす

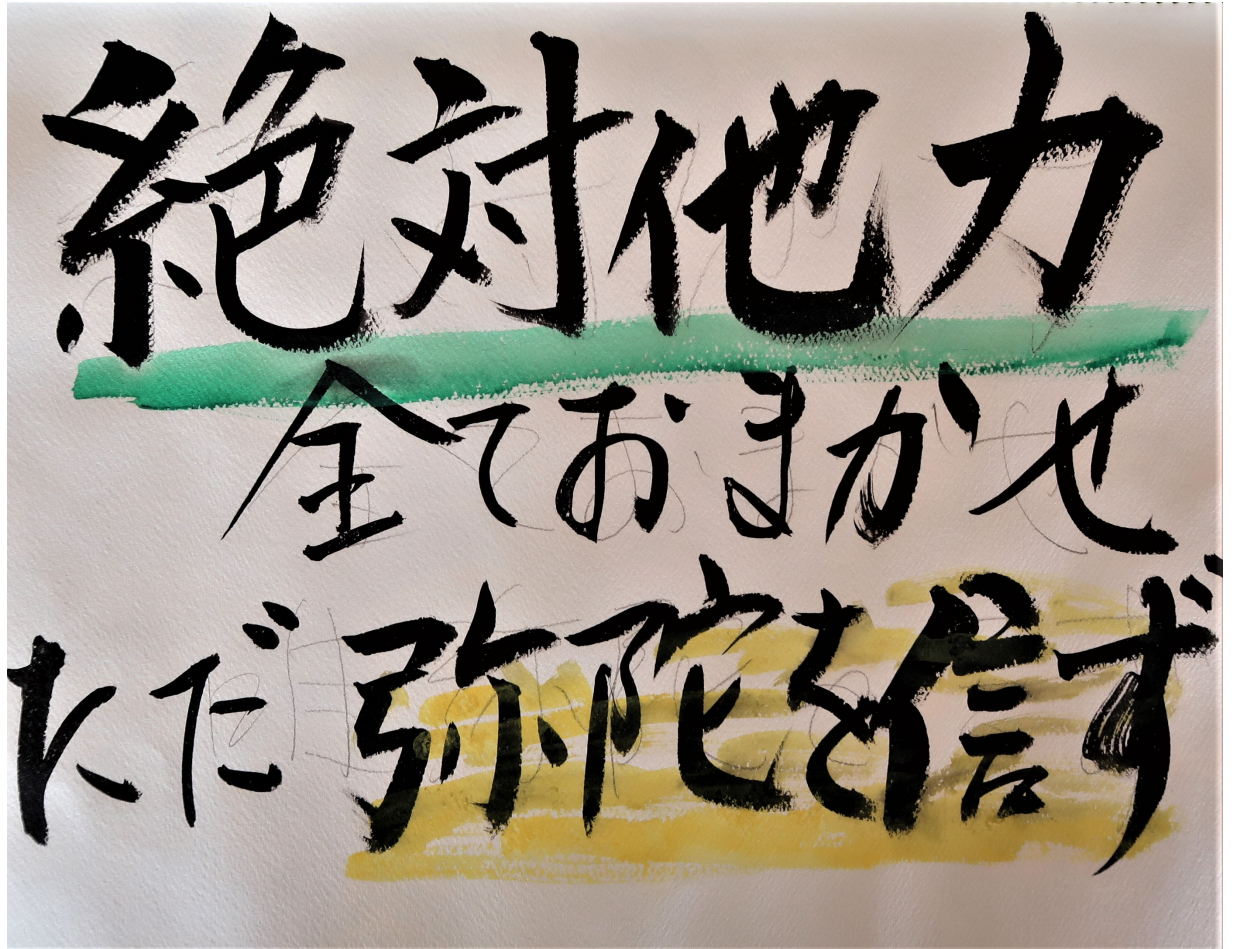
とうたわれております。

意味

今の世の人々は  
目先の欲を満たすために  
自らの幸せを手に入れるために  
日時の善悪吉凶を選び 天や地の神を崇め  
占や祀りをもって手に入れようと  
必死に努めていることは  
とても悲しいことである

親鸞聖人の生きられた時代も今の時代も人間は変わらな  
いことが伺えますが、仏滅や友引などの「六曜」を気にし  
たり、星座や血液型の占いに振り回されてしまうことは何  
と愚かなことかという生き方を教えてくださっています。  
もちろん、自然の恵みに感謝し、その想いで手を合わせ願  
うことは否定はしませんが、自分の都合で根拠のない迷信  
に振り回される自分勝手な考え方、生き方がいかに無意味  
であるかを示していると思います。

仏滅や大安などは仏教や日柄の良し悪しとは全く関係は  
ありません。元々は中国の戦国時代につけられたものが漢  
字が変わり日本に伝わったと言われていますし、占いも  
「その根拠は何？」と言われても根拠に基づくと説明は不可  
能でしょう。思い通りにいかないことが続いたとしても、  
それは運が悪いとかではなく、必ず物事が起こる原因がそ  
こにはあります。おみくじで大凶を引いてしまい、その後  
何らかの災いが起こったとしても、その災いには必ず起因  
となった事象があります。それを「大凶を引いたから」  
「日柄が悪かったから」「厄年だから」という理由で済ま  
せてしまう人間の心のあり方に問題があるというところで  
しょうか。それを理屈でわかってながら、目先の欲に溺れ  
てしまう自分を問いていかなばなりませんね。



◆「絶対他力」なんてむずかしい言葉だな。「阿弥陀さんから差し向けられる比べようもない力」とでも言おうか、つまり、肩の力を抜いて、僕はすべての人生を阿弥陀さんにお任せしたんだ。◆僕の中の不安は消し飛んだ。たとえこれから先どんなことが起きようとも、阿弥陀さんにお任せしてあるから心配ない。たとえ自分にかなる困難がふりかかろうとも受けて立つ。◆こんな勇気が湧いてきた。そして、その通りになった。僕は無事故郷の地球（浄土）へ帰ってこられたんだ。◆どうだい？阿弥陀さんを信じた僕がちゃんと浄土にたどり着いた話は皆さんにとっても心強いことではないかな？

（続く）

## ハザード会報告 野呂博子

◆夏休み終盤の八月三十日(月)、ハザード委員会の代表メンバー四人が愛西市役所に、『災害時における質問状と要望書』を持って、危機管理課と話し合いに行きました。

### 質問・要望の要旨は

★「リニア残土を愛西市の防災拠点の盛り土に使用する方針が決まったこと」について。

◎避難用高台としての盛り土を各地区に造ってほしい。高齢者も多いのでは非実現を！

◎市として高台は何ヶ所必要と考えているのか？

◎高台一ヶ所につき、高さ・面積・避難できる人数の想定・完成にどの位の時間がかかるのか？

◎地盤が緩い地域なので強化の方法は？

◎濃尾平野で大小の河川が多く洪水等の危険性が高い。できれば避難タワーが欲しいがタワーに比べて高台はどれくらい費用を抑えられるのか？

### ★避難タワーを是非作ってほしい

◎愛西市は海抜ゼロメートル地帯。高い建物は少なく、避難所は遠く液状化も懸念され逃げ場がない。高齢者も登れるタワーがあれば安心できる。

◎タワーは単なる避難場所では無い。水害等で何日も水が引かなければ避難所としての機能が求められ、物資の備蓄が必要。

◎近隣の蟹江町は高台、飛鳥村は避難タワーを作っている。愛西市も、災害に対する危機感を持って市民に防災意識を高める啓発を強くするべき。

以上はハザード委員会の**中高生の意見**です。簡単に実現出来るとは思っていません。が、愛西市の一市民として、真剣に命を守ることを考えているのです。市

役所は必ず質問への回答をする！と言いました。九月二十三日現在、回答なし。この様な質問状に対する答えは、**市の行政にその気があれば、市民の命を守るため行政の計画書にしっかり明記してある筈**。市側との話し合いの感じで、すぐに回答は来ないだろうとの予感が当たりました。

◆生徒達も同じで、そしてこう言っていますよ。

『**行政はこの様なことは考えて無かったんだ・だから回答できない。やっぱりな。**』

こんな事恥ずかしい！

将来を担う若い人の要望を真摯に考え、少しでも実現に向け頑張る姿を見せるのは大人の義務なのです。本来ならば、中高生でも考える事を行政が考えないはずはないですけどね。

## 仏教会報告

野呂美道

◆先月号で、市との話し合いの様子を述べた。それを踏まえて市議会が行われ、議員の一般質問の中で、災害時の犠牲者の遺体安置所についての項目が設けられたので、傍聴に行った。◆残念ながら、市の対応はまだまだで、市の火葬場に100体の遺体を安置するとあるだけで、進展していない。あそこはハザードマップで水没する場所だ。遺体を保護する袋も数十個ほどしかなく、ましてや夏場を凌ぐドライアイスの確保の計画もない。◆お手上げ状態の遺体処理計画だ。だから民間の寺院で遺体を保管することが出てきているのだ。仏教会は快く協力を申し出たのだが、それに対する市の対応は甚だ消極的だ。◆とりあえず、立田地区の水害の恐れのある地域の寺院と協定を結び、いざという時に備えるなら、一つの前進だ。ほかの地区や町村もこれにならうだろう。是非、愛西市がその先陣を切ってほしい。◆他の町村の先駆けを愛西市でやってほしい。きっとそれは将来の防災政策の推進力になるはずだ。寺院は全面協力するだろう。

第3回以降は寄せられた文章です。老僧の激励文も紹介されています。  
原稿ありがとうございました。

福田道子(長女)

母と同じ年になりました。

田鶴ちゃん、負けるな！

皆さんお変わりありませんか。コロナのことで例年にな  
ない大変なことになりました。

気を付けて生活しましょう。私は、母さんの亡くなっ  
た93歳になって、日に日に老化が進み、不安な生活  
です。

田鶴ちゃん(3女)が、病気になり気の毒で仕方あり  
ませんが、どうすることも出来ず、可哀そうです。人  
生はどう一生を終わるか判りませんので、敏彦さんが  
皆さんの為に、このような企画してくれて感謝してい  
ます。

信正寺は、世の中の変化でどこのお寺も経営が成り立  
たず気の毒です。

信正寺の年間の行事には、心ばかりの協力をさせても  
らいたいと思います。敏彦さんが、親身になって心配  
してくれて本当に有難く感謝で一杯です。

不安な生活ですが、どうぞ、気をつけて、機会があれ  
ば皆さんと会いたいと願っています。



綺麗な姉、母も元気でした。  
30年前

激励メッセージ

p.3

安泉寺(愛知県)・住職 野呂美道様から

ファミリーの皆様へ

※ 野呂ファミリーの再構築を願っています。

※ 同寺院とは、父親【元、橋本新吾】が僧侶になるた  
めに橋本家から養子になり、幼少時から青年まで  
僧侶としての基本を指導され、育てられた深いご  
縁あるお寺です。

2016年に札幌、中川にお尋ねしてもう5年近くにな  
ろうとしています。

創刊した新聞はほのぼのとして微笑ましく、野呂ファ  
ミリーの絆を深め合う素晴らしいツールだと、もろ手を  
挙げて称賛いたします。(よくやっただ！)私の発行する  
寺報も、檀家と寺を繋ぐ大切なコミュニケーション手段  
として、ますます意味を深めてきたように思います。次  
号で一二〇号、毎月休みなく10年間続けてきたことにな  
ります。

これは、ひとえに読者の皆様の励ましの賜物と、深く、  
深く感謝しています。敏彦さんが、野呂ファミリーの再  
構築を願って、止むにやまれぬ気持ちで発行されたこと  
に、心からエールを送ります。

野呂家は、祖父正音の代から血縁の分家はありません  
でした。私の次男がやっと野呂の姓を起こしてくれまし  
た。でも姻戚にこんなに多くの野呂ファミリーが育って  
いたことに驚嘆します。

私がいつも感動してやまないことは、祖父正音と橋本  
新吾さんとの麗しい師弟関係です。

新吾さんが野呂家に入籍してまで熱心に仏法を学び、  
単身函館に行き全道に念仏の教えを広めたことは驚嘆に  
値します。「みわさん」という素晴らしい伴侶を得て、厳  
しい豊稔の地、中川町で信正寺を建立するまでのお話  
は、「大草原の小さな家」でおなじみのアメリカの西部開  
拓史を解き聞くようです。

コロナで、田舎生活が見直される日が来るでしょう。  
中川町に移住した若者の話も聞きます。過疎に負けない、

まさかの出来事

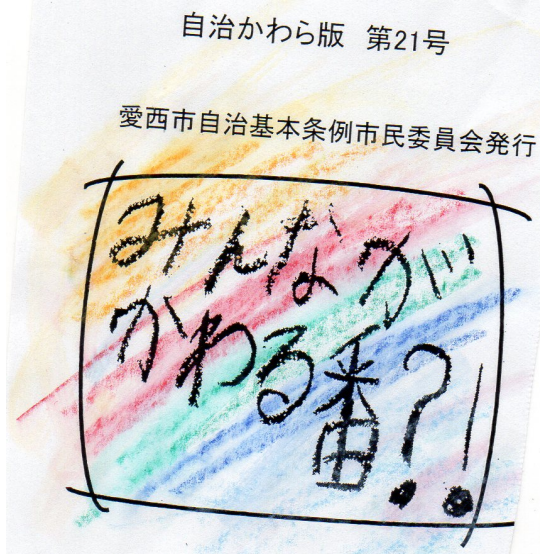
◆会議を重ねていよいよ草稿が出来あがると思われたころ、市から信じられないことが申し渡された。「条例は時期尚早」という言葉。一同開いた口がふさがらなかつた。◆そもそも条例を創りたので集まれと指を立てたのは前市長。私たちはその指に止まったのだが、間もなく市長は去っていった。(私たちをほっぽりだして)そして新たに立った市長は果たして条例制定のことを前市長から申し送りされていたのだろうか。◆今まで何十回も(70回)議論を重ねてきたのは何の為だったのか? 私たちは大変に困ってしまった。さりとて委員会を解散するのはあまりにも納得できない。◆市民が市へ条例を創ってくれと請願した訳ではない。委託したのは市の方なのに、途中で時期尚早とはあまりにもつじつまが合わない。そのことで、逆に私たちはどうしても条例を制定することにこだわることにした。

起死回生の大作戦

◆そこで作戦を立てた。それは一般市民を味方につけることだった。具体的に言うると、市民に条例の必要性を働きかけることにしたのだ。◆愛西市の各地域には様々な分野で自治が育っている地区がある。その地区の代表者に取材して、自治を育てた苦労話や、現状を市民に知らせるといいう情宣活動を開始した。◆自主防災活動が盛んな地区、

地域の盆踊りで絆を深めている地区、子ども会活動を頑張っている地区、環境保全活動を全戸で取り組んでいる地区、老人サロンを作り憩いの場所づくりをしている地区、などなど毎月委員たちで取材を重ね「みんながわかる版」と題した新聞を発行し市内全戸に回覧していただいた。「かわる版」は「かわら版」をもじったものだ。◆この運動は大変だったけれども、わたし達委員にとってはとても刺激になった。毎月取材原稿をまとめ編集会議を経て市役所で数千枚の印刷、仕分けを行った。今から思えばよくやったと考えてる。◆それともう一つ、私たちの思いをどこかの誰かに伝える必要を感じた。そこで市内6校の中学2年生を対象に、自治基本条例の内容を出前授業でアピールしようと計画を立てた。授業のシナリオや紙芝居(グレードアップして大壁画に)などを手作りし、子ども達にも分かりやすく伝えることにした。やがてその努力は功を奏した。

(続く)





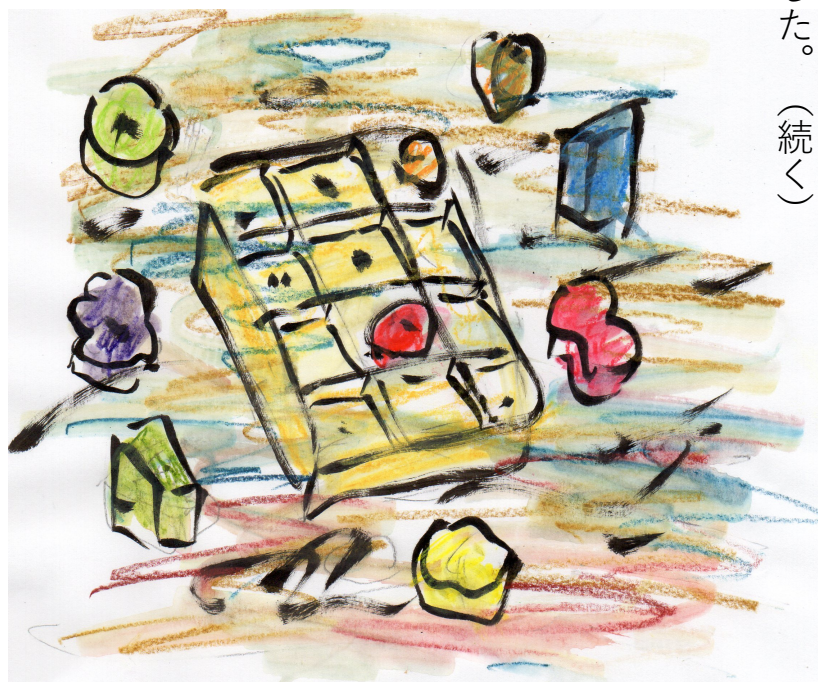
◆桑名の檀家でお盆のお経の後、集まった子どもたち「飴買い幽霊」の話をしたら、何という事だ、近くに同じ伝説があり、飴も販売しているという。八月、地藏盆の日にわざわざ檀家の方が飴を持って来てくれた。パンフレットから一部を転用する。◆一六九五年（元禄半ば）浄土寺に不思議な事件が起きた。白く青ざめた三十余りの女性の客が来た。乱れた黒髪、透き通るような姿で足はあるような無いような。女性は少しばかりの飴を受けとりその場を後にした。売り上げを数えようとすると銭と混じりシキミの葉があった。この出来事は数日おきに女性が飴を買いに来る日に限って起こった。◆主人は店の小僧に「跡をつけて家を確かめてくれ」と命じた。小僧は言いつけ通り跡をつけていったのだが毎回見失ってしまうのだった。そこで次には主人と共に追いかけてみた。不思議なことに浄土寺門前まで来るとその後行方が知れなくなった。◆住職に話してみると「ひよっとしたら数日前に亡くなった身ごもった女人かもしれない。」主人は驚き「なまんだぶ、なまんだぶ」と唱えながら帰っていった。◆住職は数日後、埋葬した女人が生きているのではないかと、寺社奉行に許可を得て、墓を掘り返した。なんと、棺桶の中では、女人の遺体の横で赤子が飴をしゃぶりながら元気な鳴き声を上げていたのだった。◆「この浄土寺は子宝の寺だ！」と民衆は喜び、噂が知れ渡った。夏の終わりの地藏盆には、「幽霊飴の浄土寺」と話が受け継がれ今日に至っている。◆私

はそんなことは全く知らずにこの話をした。そして、近隣で幽霊飴を売っている寺があるという不思議なご縁を得た。表紙の飴はそこで販売している本物の飴。女性は私が想像して付け加えた。金づちで割って舐めたら優しい味がした。◆民衆はこの話を恐れることもなく、「幽霊飴」の登録商標で飴を販売し、それを買いに来る風習を連綿と守っている。幽霊飴伝説は全国に沢山の類似の話がある。子どもを思いやる母の思いはたとえ亡くなったあとでもこうして続くものなのだ。◆哀れではあるが何というけなげな愛情であるのか。◆私はこの伝説を単に迷信として捨て置くのほもったいないと思ひ、皆さんに紹介した。そして、ずっとこの話を飴に託して守っている桑名の民衆の素朴な信仰心を微笑ましく思った。



◆みんなに内緒で離れに行きますけれども、背が立ちませんものですか、リンゴ箱のよきなものを持ってきて、そこに乗って窓を開けます。すると母がいるわけですね。お母さんがいたのですから、そのまま、またいで行こうとすると、僕に対して、この母が非常に恐ろしい人になりました。◆口汚くののしりながら、「また来たか、このくそだわけ！」などと言うわけです。「くそだわけ」とは名古屋独特の言い方ですね。「たわけ」に「くそ」がついているのです。(笑い)そして、物が飛んできます。僕にあたります。コップが飛んできて、あたって割れ、血が出たことも覚えていません。◆毎日毎日、行くたびにこんなふうには追い返されました。丁度今日のよきな雨の日に、僕は近所の若い奥さんに、実家のある京都から、箱に入れたお菓子をいただきます。京都のお菓子というのは中身も綺麗ですが、箱もとても綺麗にできていました。これをもたらったとき僕は何を考えたのでしょうか。◆こんな綺麗なお菓子をもらったんだ。お母さんにこれを見せればきっと中に入れてくれるのではないか、そう考えたのです。◆いつものようにリンゴ箱に乗っかりまして、窓を開けました。母がいるものだから、なんか飛んでこないようにと思っ、お菓子の箱を振って見せましたが駄目で、また何か

が飛んできました。何があたったのでしよう。お盆だったかもしれませんが、何かがあたって、その勢いで僕は下に落ちこちてしまいました。泥が跳ね、僕の顔も泥まみれになりました。お菓子も箱から中身が飛び出しました。泥の中に散らばったお菓子を拾いながら、僕は心の底から「ちくしょう！」と母を憎みました。もう二度とあんな人の顔など見てやるまい、と思いましたが。それっきり僕は離れに行かなくなりました。(続く)

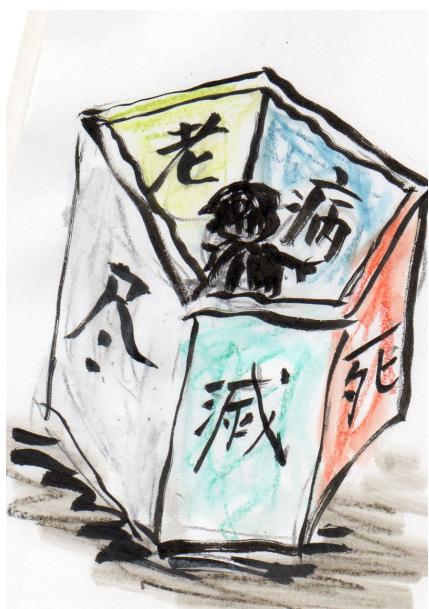


◆この世において、どんな人にもなしとげられないことが五つある。一つには、老いてゆく身でありながら、老いないということ。二つには、病む身でありながら、病まないということ。三つには、死すべき身でありながら、死なないということ。四つには、滅ぶべきものでありながら、滅びないということ。五つには、尽きるべきものでありながら、尽きないということである。◆世の常の人びとは、この避けがたいことにつき当たり、いたずらに苦しみ悩むのであるが、仏の教えを受けた人は、避けがたいことを避けがたいと知るから、このような愚かな悩みをいなくすることはない。パーリ『増支部経典』より

◎どうしても避けられないもの

◆生きていくかぎり、絶対に対処しきれない現実というものがありません。それはどんな人でも、老い、病、死からは逃れられず、ものは必ず滅び、やがて尽きてなくなってしまうということです。◆この老・病・死・滅・尽という「五つの壁」は、避けることのできない仕組みといってもよいでしょう。この世に不変のままあり続けるものはないのです。◆それでは、私たちはどう生きていったらいいのでしょうか。それらのどうしようもない現実には直面したとき、自分ひとりがそうならないまうのではない、すべての生きとし生けるものにとっても同じなのだ、と冷静に考えられる

でしょうか。◆また、この「五つの壁」に突きあたったとき、「自分は悩むだろう、弱るだろう、悲嘆にくれてしまうだろう、号泣してしまうかもしれない、心が混乱してしまうかもしれない、食事も喉を通らないかもしれない、顔色も悪くなってしまうかもしれないし、仕事に身が入らなくなるかもしれない、ライバルは喜ぶだろう、友は心配するかもしれない」と、予想される事態をあらかじめ考えておくことができるでしょうか。◆もしもそのようにきちんと思えることができているのであれば、心配事という毒矢がささっても、きつと引き抜くことができるはず。◆ブツダの教えをしつかりと聞いて、避けられない現実を直視することができれば、憂いはなくなり、心を穏やかにすることができるよう。◆その心が穏やかな状態こそが、「涅槃」といわれる、さとの境地なのです。



十月の行事予定

環境保全代表者会 九日(土)

文芸クラブ 十四日(木)

蓮ワーク(観光協会主催) 十六日(土)

立田遺族会追弔会 二十二日(金)

今月の掲示板

失ったものを数えず  
残ったものを生かす

パラリンピック

◆「楽観主義者はドーナツを見、悲観主義者はドーナツの穴を見る」なんてのもありましたね

編集後記

◆娘の飼っている黒ネコ二匹が家中で大暴れ(笑)それを娘が優しく諭しています。将来は猫カフェの店員になりたいそうです。将来の旦那さんは顔より猫が好きかどうかで決めるようです。(住職)

◆荒山淳師には見事な原稿を寄せて頂き、感謝にたえません。安泉寺が立つ木曾川流域は海抜ゼロメートル地帯で、まさに「島」がないと沈んでしまいます。人生の暴流に流される私たちが、唯一の避難場所である「島」にたどり着く教えを素晴らしい譬えで示していただきました。この地に住んでいると特に実感がわきます。(老僧)

◆同窓生が孤独死、死後何日も経って発見されました。独居の方は日ごろから家族とのコミュニケーションを怠りなく。(老僧)

◆Kさんからの絵手紙です。

